『万葉集』から見る日本の古典 11

獨協大学特任教授　城崎　陽子

浦島太郎

先回から『万葉集』に収められている「水江の浦島子」の歌を取り上げ、祖型とおぼしきいくつかのヴァリエーションを『日本書紀』や『風土記』を取り上げながら見てきた。今回は、『続日本後紀』の仁明天皇の四十の賀に登場する「浦嶋子」の記事を取り上げて、浦島伝説の享受の様態を見てみたい。まずは、嘉祥二年（八四九）三月二十六日の当該記事を掲げる。なお、本文は国史大系本に拠るが、原文の旧字は新字に改め、特殊な文字も一部新字に改めた。

庚辰。興福寺大法師等為レ奉レ賀二天皇宝算満一于其四十一。奉レ造二聖像四十躰一。写二金剛寿命陀羅尼経四十巻一。即転二読四万八千巻一。竟更作下天人不レ拾レ芥子上。天衣麗レ払レ石。翻撃二御薬一。倶来伺候。及浦嶋子暫昇二雲漢一。而得二長生一。吉野女眇通二上天一。而来且去等像上。副二之長歌一奉献。

その2

嘉祥二年に四十の賀を迎えた時の天皇仁明に対し、南都興福寺の僧侶が都に赴き、祝意を込めた様々な物を三月二十六日に奉献した。記事にはまず、「聖像四十躰」を造って奉じたとある。そして、「金剛寿命陀羅尼経」四十巻を書写したのものを四万八千巻転読したことを、さらには「天人」が薬を捧げ持つ姿や「浦嶋子」が「雲漢（天の川）」を昇って、「長生」している姿、「吉野」の仙女が天に昇っていく姿を象った像を造り、奉献したとある。そして、最後に、これらを奉るにあたって「長歌」が副えられていたともある。

嵯峨天皇を父に、橘嘉智子を母にもつ仁明天皇は聡明で経史に通じ、文藻を愛し、書を良くしたと伝えられる天皇である。しかし、幼少時より病弱であったためか、四十の賀前後も病気がちであった。例えば、嘉祥元年（八四八）六月二十四日には「聖躬苦レ熱。誦二経諸寺一。」とあり、同年十月十四日にも「聖躬不予。遣三レ使誦二経於京城七箇寺一。」とある。さらに、四十の賀目前の嘉祥二年三月十四日にも「聖躬不予。遣下二内堅等一。誦中経諸寺上。」とあって、「聖躬不予」（天皇の身体の具合が悪くなる意）となるたびに諸寺に読経をさせていることがわかる。この仁明天皇の健康不安は興福寺の僧が四十の賀を奉献した後も続き、嘉祥三年（八五〇）三月に崩御するのである。

先に示した文中の「聖体」を観音像と擬する意見もあるが、「聖体」の

奉造と同時に日本密教の中でも延命を主眼とする「普賢延命法」を担う経典の一つとされる「金剛寿命陀羅尼経」が写経され、転読されていることをみると、「金剛薩埵」か「普賢延命菩薩」の像ではないかとの説もある（林晃平『浦島伝説の研究』おうふう、平成十三年）。そして、注目すべきは、これら仏教の「聖像」や「修法」に加え、天皇の「長生」を願うために添えられた他の像のなかに「浦嶋子」が「天の川」を昇って、「長生」している姿を奉献していることである。

「浦嶋子」の像を奉献したことを、この時添えられた長歌では次のように記している。なお、当該の長歌は宣命体で記されており、長きに渡るため、該当する部分のみを書き下して記した。

澄江の　淵に釣せし　皇之民　浦嶋子が　天女釣られ来て　紫雲棚引て　片時に　将て飛往て　是そ此の　常世の国と　語らひて　七日経しから　限り無く　命有しは　此嶋にこそ有けらし

「澄江」は「住吉」に等しく、その土地の漁師であった「浦嶋子」が天女と共に常世の国に飛んで行って、七日経ったところで帰ってきたが、永遠の命を得たといった伝承を歌句にて誦詠したのであろう。この歌と共に、「浦嶋子」の像が奉られたのだ。先回にみた『万葉集』では「浦嶋子」は「三年の間」常世の国に出かけていたことになっていたし、「玉櫛笥」を少し開けてみると、「白雲」が常世の方へ棚引いてたちまちにして老人となり、息が絶えてしまったことになっていた。つまり、『万葉集』の「浦嶋子」から仁明天皇の嘉祥二年の記事までに伝承は変化し、「浦嶋子」はいつしか「雲漢」を昇り、常世の国を往き来した「永遠の命」をもつ人物として語られ、天皇の「長生」を願う「賀」に登場することになったのである。ちなみに、浦嶋子は、淳和天皇の天長二年（八二五）には、常世国から帰ってきたという記録がある（現存の『日本後紀』には当該部分が欠落しているが、後代の『水鏡』や『帝王編年紀』にはその記事が残る）。嘉祥二年に二十五年ほど先立つ時代のことであるから、伝承は信憑性を伴われて語られていた可能性もある。

興福寺の僧侶たちが仁明天皇の「四十の賀」、しかも「長生を祈る」という特別な祝意を示す時において「苦心の発案で『浦嶋子』の像を奉献した」とは考えにくい。そこには「常世の国」を往来した「浦嶋子」の伝承が息づき、「浦嶋子」が「長生」の象徴として受け止められていた事実があったと考えるべきであろう。

高尾山の昆虫

オオスカシバ 97

毒針を持つハチはその毒性から、人は勿論のこと捕食生物からも敬遠されますが、虎の威を借る狐の如くハチに擬態する虫たちは少なくありません。

トラカミキリやホソコバネカミキリ、ハナムグリの仲間、アブに至るまで多種多様です。

高尾でも晩夏から秋にかけて各種の花で見られる、オオスカシバはスズメガの仲間で立派な蛾であるのにハチと間違えられ、近くに飛んで来ると女性たちが悲鳴を上げたり、母親が子供に注意を促したりと軽いパニック状態になります。

漢字で表記すると「大透かし翅」で透明感のある翅が特徴的であり、頭部や背中はウグイス色で腰の辺りに赤い太い横帯が入りその下は黄色、そして末端は黒い毛の束があり、意外に可愛らしいことに気がつきます。

羽化直後は翅に鱗粉があり蛾らしい姿をしているものの、羽ばたきにより鱗粉は取れてしまい透明の翅に変身します。

またハチドリのように軽快にホバリングをすることで知られ、ハチでないことが分かれば多くの人が、その優雅な舞に魅了されるのではないかと思います。

（標本 TAKAO 599 MUSEUM・文 松島　孝）